

● 感想

【 キリスト教文化、舶来思想としての白百合概念 】

キリスト教で百合が白いもの、純潔を喩え、象徴することを日本に紹介したのは、ひょっとすると漱石(1867-1916)や鏡花(1873-1939)の時代の、こういう(『薤露行』(明治38年)、『紫障子』(大正8年))翻訳・翻案だったのではないだろうか。つまり白百合概念は、ここに始まり、彼らによって意識的に普及させられたものなのではないか。(p.41)

『つつじ読書会文集 第42号 令和4年』で「児童の発見」について、柄谷行人『日本近代文学の起源』を引いて、「もち論児童は昔から存在したが、柄谷行人は現在考えられているような対象化された「児童」はある時期まで存在しなかったというのである」というのと同様に、白百合概念も明治(1868年～)以降、近代化のなかで、つくりだされた概念であるといえる。

著者は、「思うに、ここでたどってきた山百合の歴史は、日本の文学における一植物の受容の歴史の一例、典型的とはいわないまでも象徴的な一例であった。」といい、次のように結論づける。「日本文学は実は、自然の植物に対して、かくも冷淡であり、かくも狭量だったのである。(p.55)」あるいは、「しかし山百合の身になってみれば、哀れなものすら感じる。人間の創造性や想像力は、優れているのか貧困なのかわからない。(p.65)」

つまり、概念=色眼鏡が自然を見えなくさせる。そして、さらにたちが悪いことに、その「色眼鏡をはずして、ありのままの自然をみよう!」というときの「自然」がもはや、「概念」であるという転倒がある。

「最近は実物(モノ)についての正確な知識や体験以前に、「自然」といったさまざまな観念や象徴を乱用しすぎるように思う。(p.105)」俗に、本好きを揶揄して ブッキッシュ bookish というが、この本を課題本にかける「読書」会は、つつじのように慎みふかいと思う。つつじの花言葉は「節度」だという。

● 参考 | ポール・ヴァレリー(1871-1945)『レオナルド・ダ・ヴィンチの方法』(岩波書店)

世の大方の人は眼をもって見るよりも知恵分別で物を見る場合が多い。色ある空間のかわりに、概念の穿鑿をする。突っ立っている白っぽい立方体は、それにいくつか窓ガラスの照りかえす孔でもあいておれば、すぐにもそれは家である。〈イエ〉なのである!抽象した性質概念をいくつか合わせた複合の観念である。その人たちが場所を変えれば、窓の並んだその列の動き、絶えずこちらの印象感覚を変形してゆく面の転回、そういうことがこの人たちからは抜けているのである——なぜなら、変わらないのが概念だからである。自分の網膜によるよりも言葉で知覚し、対象に近づくことも十分にせず、物を見る楽しみ苦しみもぼんやりとし かわからないところから、〈見どころ〉なるものを発明したのはこの人たちである。あとのことは知らないのである。だが、そこだけは、この人たちは言葉づくめの概念を後生大事に抱えこんでいるのである。(認識のどの分野にもあるこの弱点の通有の定石は、まさに明白の場を選ぶこと、万事を容易ならしめ手頃にあらしめる明確に限定された体系に安住することである……だから芸術の作品も多かれ少かれ教訓的であると言える。)そういう〈見どころ〉なるものさえも、この人たちには存外に鎖されているのである。だから、ふとした足の運び、明暗、眼差しの捉えどころが作りなす風情の移り変わりも、みなこの人たちには通じないのである。この人たちは何一つ自分の印象感覚の中では繋ぎも解しもしないのである。この人たちは、静かな水面は水平なものと同心得ているから、視界の果てに海は立っていることを忘れていて、鼻尖、肩口、

二本の指が、ふと一条の光線にひたつくっきりと浮かんでいようと、ついぞ、この人たちは、これはただわが眼の保養になった新たな一顆の珠くらいとしか見るにはいたらない。この珠こそわれのみぞ知り、ただこれのみぞ独り存在する我が身みずからの一片なのである。ところが、この人たちは名称にないものは無にひとしいと投げ捨ててしまうので、この人たちの印象の数はきっぱりはじめから決まってしまうのである!(p.28)

● しかし、一方で、概念でとらえられた自然ではなく、自然もまたそもそも概念なのだとしたらどうか。

丸山圭三郎(1933~1993)『言葉・狂気・エロス』(講談社現代新書)

私が国際基督教大学に勤めていた頃のことである。学生は多国籍で欧米人は無論のこと、アジア、アフリカの人々も少なくなかった。ある時、太陽光線のスペクトルのカラー写真を全員に配り、自分が境界があると思う場所に線を入れて色を分割するように頼んでみたところ、案の定日本人とアメリカ人は紫・藍・青・緑・黄・橙・赤の七色に分けたが、イギリス人は六色、ショナ語を話すアフリカ人は四つに区切って「両端の色は同じだ」と言った。しかも同数に区切った人びとの境界線も、すべてズレあっていたのである。

私たちが最も自然な五感にもとづく知覚と思っているものも、言語によるカテゴリー化によって蝕まれている。右にひいた虹の色は視覚だが、聴覚的カテゴリーの一例は母音のガム(※意味不明 引用者 山口)であろう。

日本語では「アイウエオ」の五つに区切られていても、たとえばフランス語は、同じ連続音を十六種類に区切っている。味覚・嗅覚・触覚も同断だろう。特記すべきは、男女の性別のカテゴリー化であり、ヨーロッパ系の言語では男・女のうちの「男」が「人間」と同じ語か同根語(man, homme, Mensch など)であるのがほとんどなのに対し、日本語の「人間」は「人と人之間」すなわち、「個を生じせしめる関係」の意なのである。(p.36)

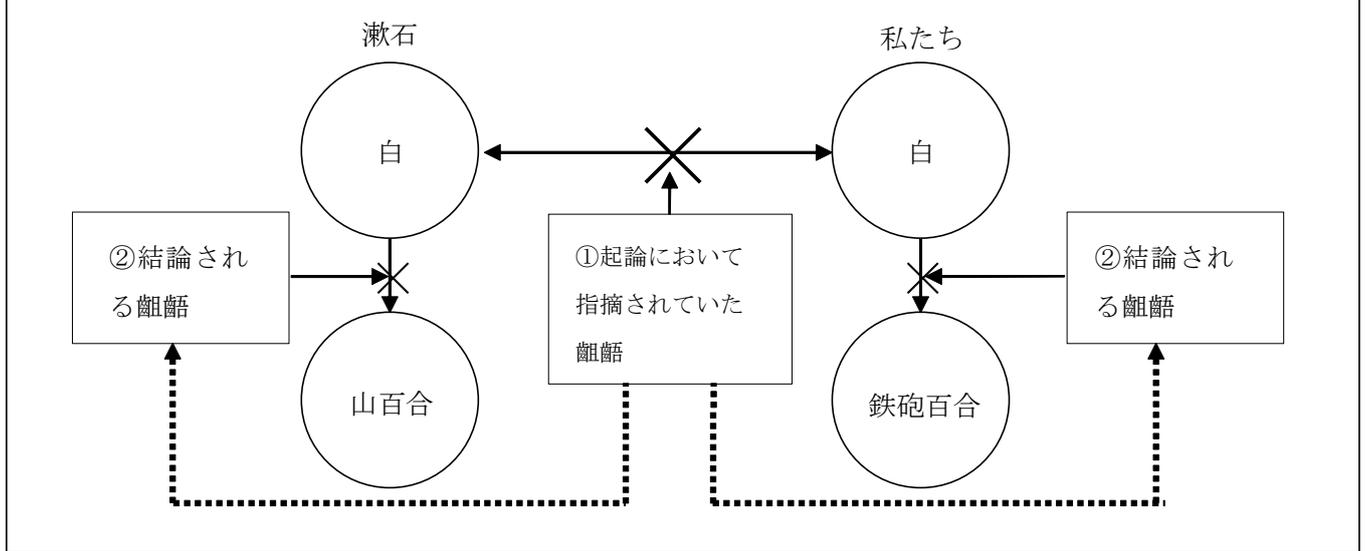
つまり、アフリカ人が虹を四色だといったからといって、虹に対して冷淡で、狭量だったといえるだろうか、いやいやない。この場合には、アフリカ人に虹は四色だというのは誤りで七色である、と正すよりも、むしろ、虹を四色と見る文化があり、なぜ四色と見るのかを理解することのほうが倫理的だといえまいか。

同様に、著者の論述も、白百合概念と実物とを比べて正誤を裁断する箇所よりも、白百合概念の経路を探っていく箇所のほうが面白い。じつは、実物を見たからといって、正しい概念が導かれるとも限らないのではないか。(あるいは正確に(七色の虹と四色の虹のように)、概念それ自体に正誤はないはずだった。)

そもそもの起論は、漱石が「白」といったために、私たちがそれを、つい私たちの「白」と同じものと考えてしまうことを窘めることにあった。つまり、問われていたのは(著者が気づいたのは)概念と概念の間の齟齬であって、実物から反証される概念ではなかった(はずだ)。(図)しかしにもかかわらず、著者の論理の運び方は、その結論において、どうしても、客観的な実物 [= 正解] から、それにいたりえない主観(日本文学) [= 誤解] をなじる、という図式をとる。私はここに違和感をおぼえる。たとえば、著者が依拠する植物分類学や、山百合の学名 *Lilium auratum* 黄金色のユリ もまた舶来思想ではないか。命名者とされる Jon Lindley(1799-1865) はイギリスの植物学者だという。(著者は、著者が植物を精緻に描写したと評する三島由紀夫と近代科学の申し子として、第二の舶来思想だともいっている (p.53))

(ちなみに私は、鉄砲百合でなく、山百合をみても、白い花だと形容する、と思う。)

(図) 漱石の白百合で、起論の契機となった齟齬と、結論される齟齬が移動



● 「黄金色のユリ」、「黄色」の筋について

たとえば「古代の日本語の色彩についての形容詞が「赤し、黒し、白し、青し」ぐらいの識別」であったという次の説明は面白い。

森田良行『日本語をみかく小辞典〈形容詞・副詞編〉』（講談社現代新書）

今日でも色彩形容詞はこれ（「赤し、黒し、白し、青し」）とほとんど変わりなく、あと「黄色い、茶色い」が辛うじて見いだされるくらいだから、いかに色に関する形容詞に乏しいかが、およそ見当つこうというものである。それも“黄の色”“茶の色”と他の物の色合いを借りて、そのような色だと間接に説明しているのだから、本来の色彩形容詞ではなかった。

古代にあっては黄や茶は、いずれも赤の範囲に含まれ、固有の色として考えられてはいない。現代語でも、その他の色は、たとえば緑や紫、橙、灰色など、みな何か他の物の名を借りて色名に代えるだけで、状態形容としての形容詞の形を持っていない。僅かにある基本的な形容詞も、語源的には、「赤い」が“明るい”意味の「明かし」から、反対の「暗し」から「黒い」が生ずるというわけで、色彩そのものではなく、明暗の言い分けにすぎない。今日、茶色系統の「赤土、赤金（銅のこと）、赤靴、赤毛、赤松、赤味噌、……」が「赤」で表されるのも、そう考えると不思議ではない。

「赤い / 黒い」が“明暗”に由来するように、「白い / 青い」も視覚の鮮明度による形容詞で、色彩そのものではなかった。「白し」が実は「著し」、つまり“著しい”“顕著”“はっきり”の意味を表す形容詞から、「青し」が「漠し」で、漠然としているさまを言ったらしいことが今日究明されている。

とすると、せっかく古代からあった色の形容詞も、実は色彩そのものではなく、色の明暗・濃淡でしかなかったということがわかる。(略)日本語は色彩に関するかぎり、極彩色の形容語を持たない。墨絵に似た白黒写真の濃淡で描写の筆を進める、至って淡泊な色感と言っていいだろう。(p.129-p.132)

黄の色は、本来の色彩形容詞ではない。この説明なら、舶来思想の〈白〉によって「黄色」の筋が無視されたのではなく、そもそも黄色は（山百合を形容する）俎上にあがっていないことになる。

● 結び | 文学について

前回の『しろがねの葉』で、上野英信(1923-1987)や山本作兵衛(1892-1984)の記録文学、記憶遺産をあげるのをコメントして、『しろがねの葉』のような「文学」と、「記録文学」や「記憶遺産」といったことのちがいを

述べられていて(間違っていたらごめんなさい!)、この両者のちがいは、今回の、文学を客観性によって読み解こうとするときにも顕著になるように思えた。

文学は、客観性をなぞるのではなく、つまり、どこか自分の外に、唯一正しい実物(これこそがむしろ舶来思想)を示すことではなく、複数の概念の衝突や、概念のつくり直しの営為があると思う。(この営為があればこそ、たとえば、『しろがねの葉』であれば、ウメと伝兵衛の付き人の罪の意識のズレを垣間見せることができたのではないか。)

したがって、『漱石の白百合、三島の松』の面白いところは、著者の日本文学への悲観的な結論ではなく、むしろ概念と概念を腑分けし、そのズレをあきらかにし、解きほぐしたところだといえる。概念はいくらでも解きほぐされ、ふたたび編み上げられうる。

● おまけ

漱石は「舶来思想」にじゅうぶん自覚的であったし、ゆえに、むしろ著者がするような、近代科学の客観性に依拠して行く蒙昧さへの断罪をこそ、警戒していた。

例へば日本語で「秋風(しゅんぷう)」と「あきかぜ」とは形式は異つて思想は同じである。「亡くなる」と「ごねる」、「あゝわが夫(つま)」と「お前さん」も同断である。此等につき何を標準として選択を行ふか。あらゆるものが同等であるが、只習慣上、此各組(イチペア)に附着(アタッチメント)する感情的要素(エモーションナルエレメント)が違ふ、それが標準となる要素である。「秋風」は高尚で、「あきかぜ」は下卑て居ると云ふ理屈はないにも拘らず、甲を取つて乙を棄てるのは、習慣に着き纏う感情を標準とするからである。そして此種の選択を行はない場合には不似合(インコングリユアス)の結果(エフェクト)が生ずる。立場を変へると西洋人とでも同様でなければならない。

(「英文学形式論」柄谷行人『漱石論集成』より孫引き p.243)

漱石は、小説家に「一叢(ひとむら)の荆棘(いばら)を切り開く」力をみとめる(『文芸の哲学的基礎』)。この意味で、「白い」百合は、山百合を見えなくさせる色眼鏡ではなく、むしろ、そのことによって見みるができるようになったという肯定的な局面をこそ、見るべきではないか。これを、僭称された客観性(近代科学の差配)のもとで、一緒くたに断罪することはできないはずだ。漱石は断罪される概念を提出したのではなく、これまでになかった別の見方を示したのだった。これはときどき、子どもが思わぬ見方を提示するのを想起させまいか。

写生文家の人事に対する態度は貴人が賤者を見るの態度ではない。賢者が愚者を見るの態度でもない。君子が小人を視るの態度でもない。男が女を視、女が男を視るの態度でもない。つまり大人が小供を視るの態度である。両親が児童に対するの態度である。世人はそう思うて居るまい。写生文家自身もさう思うて居るまい。しかし解剖すれば遂にこゝに帰着して仕舞ふ。

(「写生文」柄谷行人『漱石論集成』 p.341)

近代黎明期、漱石が目論んだ「写生文」の企図は、近代的な考え方を疑義を呈する、マルクス・ガブリエル『世界は存在しない』やカルロ・ロヴェッリ『時間は存在しない』にこそ通じているのではないか。

参考 | 柄谷行人『哲学の起源』(岩波書店)

ソクラテスのやり方はよく知られている。彼は他人の主張に対して、その反対の説を対置することをしない。相手が提示する命題 **proposition** に対して、それを肯定した上で、そこから反対の命題が引き出せることを示すだけである。これがソクラテスの問答の特徴である。彼はこのような問答法を、母が従事していた仕事と結びつけて、産婆術と呼んでいた。人に教えるのではなく、人が自ら真理に到達するのを助けることである。(※ 超感性的な真理世界と感性的な仮象世界という二重世界を否定する。つまり、どこか自分の外に、唯一正しい客観が存在しているということを否定する。 引用者 山口)(中略) ソクラテスは何も積極的なことを教えない。かといって、放っておけば、自然に自覚が生じるわけではない。自覚は、それを妨げている虚偽の前提を破ることによってのみ可能である。(p.198)

参考 | 國分功一郎『ドゥルーズの哲学原理』(岩波現代全書)

我々は「私と同じようにやりなさい」と言う者からは何も学ぶことはない。我々にとっての唯一の教師は我々に対して「私と一緒にやりなさい」と言う者であり、この教師は我々に再現すべき所作を提示する代わりに、異質なもののなかで展開すべきいくつかのシーニュ(※しるしの意味 引用者 山口)を発することができる者なのである。(p.97)

● 概念化について

参考 | 坂口ふみ『〈個〉の誕生 キリスト教教理をつくった人びと』(岩波現代文庫)

概念化は必然的に流動性を失わせ、本来静的ではないものを静的に固定する。しかし、そのことによって明らかに目に見えるようになり、捉えられるようになることは、大きなプラスである。(略)その概念がどんなにすみやかに空洞化しても、その内実をふたたび他のことば、他の概念機構で表現しようというやむことのない努力が、いくらかでもその現実の相に焦点を合わせて見続けさせるだろう。それを、はじめから捉えられないものとして、あきらめるよりは、この方がよいと私には思われる。(略)かぎりなく概念の網をつくり直し、新たにし続けるという、かつてソクラテスが説き起こした営みにくみするということだろう。(p.37)